特集

医療法人 社会福祉法人 さわらび会 職員研究発表会のその後

さわらび会では、医療、高齢者福祉、障がい者福祉の様々な分野での活動が行われています。その中で、それぞれが行っている取り組みや、さわらび会だからこそできる多職種連携などを取り上げ、職員研究発表会を開催しています。医療法人、社会福祉法人が初めて合同での研究発表会を行った二〇一三年の第一回から毎年開催してきましたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止となってしまいました。

そこで今回は、これまでの研究発表会において最優秀賞に選ばれた発表の中の一部から、当時研究した取り組みのその後の様子をご紹介させていただきます。

『皮膚乾燥がみられる患者様への保湿剤の研究とスキンケアに取り組んで』

福祉村病院　看護部　看護師／大塚　和美
石原恵理子

【発表内容】

取り組みの経緯は、当院に療養されている患者様の多くは高齢者であり乾燥による皮膚トラブルが多かったため、予防スキンケアができないか考えました。普段、皮膚トラブルが発生すると軟膏を塗布しますが、軟膏は処方が必要であり、広範囲のかさつきでは多くの量を必要とし、コストもかかります。

そこで、①院内にある薬品で簡単に作ることができる、②コストが安い、③使用感がよく誰でも使用することができる、この三点を踏まえた化粧品の基本原料ともいえる精製水とグリセリンで保湿液を作製しました。

研究としては、皮膚表面だけを主に行いました。個人差はありますが、皮膚の状態が悪化する患者様はおらず、乾燥や落屑はほとんどなくなり、肌のきめも整う患者様も見られてきました。症例研究後、グリセリン化粧水は薬局で作製し、普段の処置や入浴後のケアとして使用されることになり、フロアや浴室に置かれるようになりました。

【現在】

現在、薬局では週一回、五リットルの化粧水を作製しています。各フロアの使用状況は十フロアのうち使用しているフロアは三フロアとなっています。浴室では毎日使用していますが、使い切ることはないようです。グリセリン化粧水は冷たいという問題点だけで、温めて使用できてコストも低く、処方に関係なく手軽に使用することができます。使用を続けているフロアはそれなりの効果があり、問題意識を持っているからこそ続けているのではないでしょうか。

スキンケアはとても日常的でシンプルなケアです。しかし、安全を最優先させる現場では後回しになりがちなケアにもなります。

症例研究中、目に見えて効果が現れ、当時のスタッフ間でスキンケアの大切さが実感でき、やりがいも生まれました。ケアに手間を惜しまず、患者様と向き合うことで異常の早期発見にもつながるのだと学び、チームが一丸となって問題に取り組むことの面白さも実感できました。環境が変わるとできていたことができなくなることも多いですが、患者様にとって今何が必要か、どうしたらより良い療養生活が送れるかは、これからも忘れずに援助していきたいと思っています。（大塚）

『経口摂取維持への取り組み』

特別養護老人ホーム カサ ブランカ
管理栄養士／和合　倫位

食事は入所者様の楽しみとなっています。しかし、咀嚼・嚥下能力の低下や口腔衛生が保てないことによる歯の欠損、誤嚥性肺炎など様々な要因によって経口による食事摂取が難しくなっている方が多くいらっしゃいます。そこで、「経口摂取維持」に歯科と連携し、取り組みを行いました。

歯科と連携することによって入所者様の口腔機能の見極め、要望に応えつつ能力にあった食事形態を提供することができ、また口腔衛生保持に必要な技術指導を受けることで職員のスキルアップ、口腔ケアの重要性を再認識し、適切なケアを提供することで肺炎・インフルエンザなどの病院受診件数の低減にも繋がりました。

口腔内細菌と内科疾患との関連性、咀嚼機能と老化・認知症との関連性など、口腔環境が高齢者の健康と密接に関連しているとも考えられており、口腔ケアはお口のなかを清潔に保つ目的だけではなく心身の活性化、感染予防効果も得ることができます。

カサ ブランカではご家族のご理解をいただき、毎月新しい歯ブラシを購入し、きれいな歯ブラシで丁寧な口腔ケアを行っております。また介護技術研修において口腔ケア指導講師をしている職員もおり、日々、利用者様のお口の健康を守るべくケアを行っております。

今後も経口摂取維持への取り組みを続けてまいります。（小林）

『重度パーキンソン病の予後を見据えたリハビリ介入 ～ADL・QOLともに改善した一症例～』

福祉村病院　リハビリテーション部
作業療法士／船藤　悠太
理学療法士／川村　基樹

第六回さわらび研究発表会にて、重度パーキンソン病の患者様に対して、多面的な評価から予後予測を行いADL、QOL共に改善を示し在宅復帰へと繋がった症例についての研究発表をしました。研究の概要としては、入院時のADLは寝たきり状態でパーキンソン病の重症度の指標であるホーエン・ヤール分類ではV度と最も重症度が高いレベルでした。しかしUPDRSという評価法を用いてパーキンソン病を詳細かつ多面的に評価した結果、運動機能面以外の機能は保たれていたこと。先行研究を参考に注意機能、視空間認知などの認知機能が保たれていたことからADL改善の可能性が期待できたこと。また、COPMという面接を用いた評価から、患者様にとって重要な作業活動を抽出し遂行度、満足度を確認していく中でリハビリ目標を共有することができ、能動的にリハビリに取り組めたことから身体機能やADL、QOL共に改善を示したという内容です。

この症例を通して、リハビリを進めていくうえで対象の方が今までどういった生活をしてきたのか、どういった作業活動を重要としてきたのか把握することが重要であり、リハビリの目標も作業療法士と対象者、またチーム全体で共有することが重要だと改めて実感しました。二〇一八年、作業療法は「人々の健康と幸福を促進するために、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。作業とは対象となる人々にとって目的や価値を持つ生活行為を指す」と定義が改変され、より対象となる方の生活歴や個別性に合わせたリハビリが求められています。

研究発表会後の取り組みとして、部内で事例報告や研修を行いました。また慢性期医療学会にて学術発表を行い、様々な意見やフィードバックをいただきました。今後もリハビリを通して対象となる方々の価値、意味のある作業を焦点化し、その人らしさを大切にして関わらせていただきたいと思います。（船藤）

『EPA看護師の貢献と今後の課題』

福祉村病院　看護部
EPA看護師／ジェネリン・タン・ラス
ナイラン・ジェイ・アレハンドリノ
バーナベド・アザルコン

【発表内容】

❶言葉の問題

患者様とそのご家族への対応、入退院の説明、医師からの指示受けなど、日常会話にはない当院における病院案内や専門用語が飛び交う専門的な会話など、日本語の難しさに改めて直面しました。

❷看護師として様々な記録など

受け持ち患者様の日々の記録や入退院の記録など、様々な書類の記入や評価などがあり、手書きで記録を書かなければなりません。看護記録はまだまだ分からない漢字や読み方が沢山あり、とにかく読解や記録に時間がかかっていました。

【現在】

❶言葉、会話の課題について

EPA看護師として働き、二年が経ちました。今は医師やスタッフの皆さん、患者様とのコミュニケーションを増やし、電話での対応とリーダー業務もやり始めました。最初は大変でしたが、「習うより慣れよ」という名言を常に抱き、名言通りに実行し経験を重ねて頑張りました。時々、言葉の言い間違いや聞き間違いをしてしまいますが、諦めることなく積極的に会話をしています。その結果、いろいろな言葉や仕事のやり方などをより早く覚えられるようになり、分からないことも相談しやすくなり、自分の意見も伝えられるようになりました。現在は業務を一人で行うことも増え、失敗してしまったこともありました。でも、次はもっと注意して反省を生かして業務を行い、今ではスムーズに業務にあたれるようになってきました。責任感の気持ちも強くなり、自分で判断することが少しずつできるようになりましたが、まだまだスタッフの皆さんのご指導が必要ですし、サポートしていただけたらと思っています。

❷看護記録の課題について

日本語で看護記録を書くということが本当に難しいです。記録を書くようになった頃はミスに繋がらないよう自分が作成した文章をスタッフの方に確認、相談して記録を書いていました。今では記録をすることにも慣れてきて、自分で文章を考える時間が短くなり、その場でスムーズに書けるようになりました。今後は日本人の方が記録を読んだ時、違和感のない記録を書きたいと思っています。

今後も会話と記録が上達するように努力していきます。　（ジェネリン）

『介護職員の職場環境整備から腰痛予防を目指した取り組み』

特別養護老人ホーム さわらび荘
介護士／青木　晴美
介護支援専門員／宮崎真理子

さわらび荘では、職員の腰痛改善への取り組みとして、移乗用リフターの導入を行いました。導入当初は、「操作に自信がない」「誤作動が怖い」「時間が余計に必要となる」などのマイナスの意見が目立ちました。しかし、時間計測、イラスト付きマニュアルの整備などにより使用率が向上。発表時二台の導入であったものが、現在は三台の導入が完了し、すべてのフロアーで、特に移乗に全介助を要する入所者様の方に使用しています。

移乗用リフターの導入効果は、職員の腰痛予防への意識向上があります。無理な介助による入所者様への身体的な負担軽減への意識も高まり、リフト以外の介護用品の活用も積極的に行うようになりました。

例えば、移乗時の負担を軽減できる『移座えもん』シートも、リフトよりも前の段階で導入を行っていました。導入当初はリフトと同様、あまり積極的な活用に至りませんでしたが、リフト導入後は腰痛改善への有効性が認識され、全フロアーで活用されています。

今後の課題は、研究発表でも挙げさせていただきましたが、入浴介助時の腰痛発症リスク、ヒヤリハット件数の改善が見られないことです。特に寝浴台への移乗用リフトの導入を今後検討してまいります。　（宮崎）

第1回～11回
研究発表会最優秀発表リスト

個別事例

- **皮膚乾燥がみられる患者様への保湿剤の研究とスキンケアに取り組んで**（2013年12月発表）
  発表者：福祉村病院 看護部 看護師／大塚和美・石原恵理子
- **さわらび会の連携による、重度知的障害者の安定した生活の実現にむけての取り組み**（2013年12月発表）
  発表者：珠藻荘 相談支援員／玉城琴子　しろがね サービス提供責任者／金田靖子
- **認知症による吸綴行為を行う患者様への取り組みについて**（2016年4月発表）
  発表者：福祉村病院 看護部 看護師／廣田瞳・宮脇千鶴子
- **あかね荘食生活改善委員会の取り組み～40代ダウン症男性の誤嚥性肺炎の再発予防の取り組みを通じて～**（2017年10月発表）
  発表者：あかね荘 支援員／杉山拡生・新井海人
- **生活を楽しく過ごしていただくために**（2018年4月発表）
  発表者：カサ ブランカ 介護士／日比野汐織・石井恵理
- **居心地の良い、楽しい住処となる為に～入居者様の気持ちに寄り添える介護士に～**（2018年10月発表）
  発表者：グループホーム フジ 介護士／大久保信江　管理者／白井有喜子

複数事例

- **じぶんの力でじぶんの生活を～介護力向上講習会での取り組みを通して～**（2013年12月発表）
  発表者：第二さわらび荘 介護士／白井内海・松原孝
- **腸内環境を整える一つの試み**（2014年12月発表）
  発表者：第二さわらび荘 管理栄養士／黒柳啓子
- **経口摂取維持への取り組み**（2016年4月発表）
  発表者：カサ ブランカ 管理栄養士／和合倫位

リハビリ

- **認知症リハビリの取り組み**（2013年12月発表）
  発表者：福祉村病院 認知症リハビリプロジェクトチーム 作業療法士／加藤智太　臨床心理士／金沢歩美
- **認知症リハビリプロジェクト「移動喫茶店」における香りがもたらす情緒安定の効果について**（2016年10月発表）
  発表者：福祉村病院 看護師長／八木聖名子
- **重度パーキンソン病患者の予後を見据えたリハビリ介入～ADL・QOLともに改善した一症例～**（2017年4月発表）
  発表者：福祉村病院 リハビリテーション部 作業療法士／船藤悠太　理学療法士／川村基樹
- **認知症リハビリプロジェクト「野球・卓球」の取り組み**（2019年10月発表）
  発表者：福祉村病院 リハビリテーション部 作業療法士／船藤悠太

全体取組

- **スピーチロック廃止に向けて**（2015年8月発表）
  発表者：ジュゲム 介護士／柴田洋年
- **看取り介護への取り組み 第二さわらび荘での17例の事例について**（2015年8月発表）
  発表者：第二さわらび荘 ユニットリーダー／西崎弘雅　看護師長／鈴木あきよ
- **褥瘡発生ゼロを目指して～褥瘡委員会の取り組み～**（2017年10月発表）
  発表者：福祉村病院 看護師／尾崎里香　薬剤師／石黒那月
- **下剤連続投与をなくし自然排便を目指して患者様の笑顔につながる穏やかな入院生活の提供**（2018年4月発表）
  発表者：福祉村病院 介護士／村田淳・中神往奈
- **介護職員の職場環境整備から腰痛予防を目指した取り組み**（2019年10月発表）
  発表者：さわらび荘 介護士／青木晴美　介護支援専門員／宮崎真理子

その他

- **独居でも安心して生活できる地域づくり推進会議～県営金田住宅での取り組み～**（2013年12月発表）
  発表者：さわらび地域包括支援センター 主任ケアマネージャー／白井秀明
- **大規模災害に備えて～福祉避難所体験から見えたこと～**（2016年5月発表）
  発表者：明日香 サービス管理責任者／末松秀章・藤井葉子
- **EPA看護師の貢献と今後の課題**（2018年10月発表）
  発表者：福祉村病院 EPA看護師／ジェネリン タン ラス・ナイラン ジェイ アレハンドリノ・バーナベト アザルコン